（様式５）

令和６年度生成ＡＩを活用した家庭学習の支援モデル校実施報告書

学校名　　山口市立　二島中学校

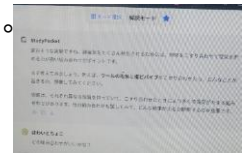
１　モデル校の概要（本事業活用と関連づけて）

〇めざす子どもの姿や学校教育目標
　本校は全校生徒３０名（１年生６名、２年生１２名、３年生１２名）の小規模校であり、多様な考えに触れる機会が少ない。生成ＡＩが生徒の支援者となり、新たな視点の獲得につながることで、生徒の学習意欲を向上させ、自己肯定感や自己有用感の高まりにつなげたい。
〇子どもの家庭学習の現状
　本校生徒は与えられた課題については前向きな姿勢で取り組むことができる。また、タブレットドリルなどのＩＣＴ活用力も高い。しかしながら、自ら進んで課題以外の学習に取り組むことには消極的であり、生成ＡＩを活用することで、基礎的・基本的な学力の定着につなげたい。

２　取組内容

（１）研究授業（理科、社会を各２回実施）

　生成ＡＩの活用に主眼を置いた公開授業を行った。



①３年生理科　単元「物質」
　身の回りにある酸性やアルカリ性の物質を生成ＡＩに提示させ、それぞれの性質について調べた。

②２年生理科　単元「電気」
　用意された器具の中から、最も静電気を発生させる組み合わせを生成ＡＩの意見を参考にしながら実験を繰り返し、静電気が起こりやすい組み合わせについて考えた。

③３年生社会科公民的分野　単元「裁判員制度」
　NHK for School「昔話法廷」を題材に、グループごとに判決を出す過程で、生成ＡＩと対話を行わせたり、評決文の作成に生成ＡＩを活用したりした。また、振り返りに生成ＡＩを活用し、即時フィードバックができるようにした。

④２年生社会科歴史的分野　単元「明治維新」
　「明治維新の最重要政策は何か」という問いに対して、意見を考えるために生成ＡＩに多面的な視点を提供させたり、文章の添削に生成ＡＩを活用したりした。

（２）外部との連携による研修の充実

　生成ＡＩの教育利用については、全国的に見てもまだ例が少なかったため、各方面との連携や研修会に参加するなどして知識や技能を習得し、実践の一助とした。

①スタディポケット株式会社との連携
　生成ＡＩ導入前の研修として、スタディポケット社を講師として招聘し、使い方や指導上の留意点などをご講義いただいた。
　また、夏休み明けに、オンラインミーティングを設定して、助言をいただいた。

②県内モデル校との情報交換会
　夏休み期間中に本校発信で、県内の他のモデル校とつなぎ、取組や課題を共有するオンラインミーティングを行った。各校の実践事例や課題を共有し、２学期以降の取組の参考になった。

③文部科学省リーディングＤＸスクール事業における生成ＡＩパイロット指定校視察
　全国での先進的な取組事例を学ぶために、１２月に千葉県成田市立西中学校の研究発表会を視察した。生成ＡＩは教師による活用や校務での利用が中心であったが、様々な取組事例が紹介され、新たな視点の獲得につながる実りのあるものとなった。

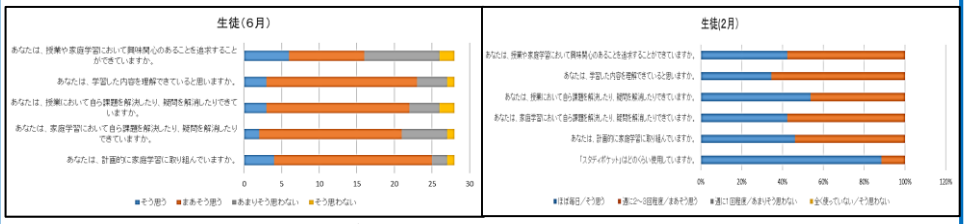
令和６年度生成ＡＩを活用した家庭学習の支援モデル校実施報告書

学校名　山口市立　二島中学校

３　取組全体における生徒・教員・保護者からの評価

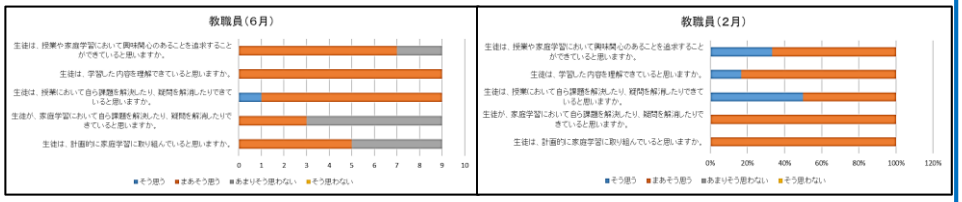
■生徒からの評価（変容実感や感想等を含む）

最初の頃は、生成ＡＩの特性（直接答えを教えてくれない）に戸惑った。徐々に工夫して活用する生徒が増えた。生徒会役員選挙の立会演説会の原稿を生成ＡＩを活用して作成したり、分からない問題を自分が納得いくまで質問をくり返したりする姿勢が見られた。



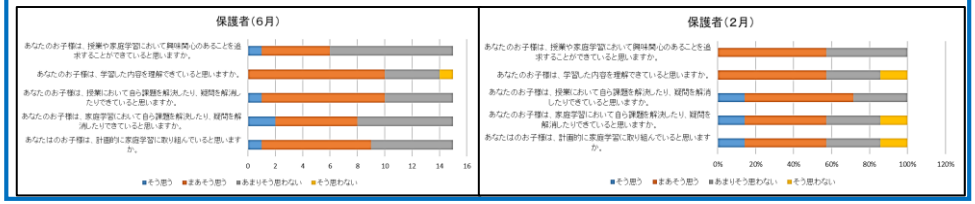
■教員の評価（気づきや感想を含む）

各教科で使えそうな場面で活用することで徐々に活用事例が増えてきた。生徒に使わせるためにはまずは教職員の活用力を高めることが大事であると感じた。



■保護者からの評価（気づきや感想を含む）

夏休み明けに、保護者向けの公開授業を行ったが、生成ＡＩに対する保護者への啓発活動を引き続き取り組んでいくことが必要である。



４　成果と課題

生成ＡＩが生徒の学習や日常生活の中に身近な存在となり、活用力が上がった生徒が見られた一方で、保護者のアンケート結果からも、家庭学習における活用に課題があることが分かった。生徒の中には、生成ＡＩが答えを教えないことに扱いにくさを感じる者もおり、生成ＡＩを使う目的や本来の学習の在り方についての指導は、今後とも粘り強く取り組んでいく必要がある。また、学校による説明や公開授業等で保護者の方に生成ＡＩを知っていただくことが家庭での活用を促進することにつながると考える。

教職員の活用については、本校の今年度の生徒会スローガンである”Try anyway”（とりあえずやてみよう）の精神で、各教科で活用が進み始めたところである。その中で、アンケートの結果分析や、行事や学習指導案のたたき台の作成、お礼状の文章例の提示など、多くの校務において、作業の効率化につながる可能性を感じた。

また授業では、紹介した理科と社会科の実践以外に、英語科では、条件に続くできる限り長い英作文を「英作文アシストモード」を活用して作成した。保健体育科では、バスケットボールのゲームでの戦術を生成ＡＩを活用しながら考えるなど、徐々に実践例が増えてきている。

今後の本校の課題は次の２点である。１点目は家庭学習において生成ＡＩをどのように活用させていくかである。本校ではやまぐちっ子学習プリント、学習ワーク、タブレットドリル、受験用問題集など多くの教材を活用しているが、それらの教材と生成ＡＩの棲み分けが生徒の中で適切にでき、必要に応じて活用する教材を選ぶ力を身に付けさせることが求められる。２点目は、生成ＡＩを使う目的を明確にした学習活動を仕組み、生成ＡＩを活用することが目的とならない授業づくりを教員が進めることで、学力向上につなげることである。

１年間の取組で多くの学びや課題が見えた。今後も継続して研修や実践を重ね、学びを深めていきたい。